

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第9回

* イタリア人のお宅拝見 ~イタリア住宅事情~ *

立元 義弘

マリオ・モンティ新内閣による一連の財政再建築の中で住宅への固定資産税が復活することになり、マイホーム購入意欲にも水が差される格好になりましたが、元来、イタリア人の持ち家比率は80%と高く、日本の64%と比べても、その持ち家志向の高さが伺えます。

今回はそうしたイタリアの住宅事情についての話をしたいと思います。一般的なイタリア人の住居はコンドミニウムがほとんどで、人口の72%がアッパルタメントと呼ばれるマンション形式の集合住宅に住んでいます。ですから、都市部ではほぼ100%の住宅がアッパルタメントであると言っても良く、一戸建ての家屋はよほどの田舎に行かないとまずお目にかかることはありません。日本人と同様、イタリア人のサラリーマンにとってもマイホームを手に入れることは人生の一大事業であることに変わりはありませんが、しかし、それは庭付き一戸建てではなく、たいていの場合、静かで便利で環境の良いアッパルタメントなのです。



【イタリアのアッパルタメント】

最近の不動産価格は横這いか微減傾向にありますが、やはりローマやミラノの大都市が高く、例えばシチリアのパレルモと比べるとその差は倍以上です。その平均的な価格を現在の為替レートで比べてみると、ミラノで平米あたり45万円、ローマが51万円であるのに対して、日本は首都圏が66万円、近畿圏で48万円といったところです。当然、物件ごとの価格も環境、交通の便などの立地条件や、広さ・設備・日当たりなどの違いによって上下しますが、日本と同様、やはり上層階ほど価格は高くなります。一方、賃貸価格で見ても、100㎡の物件が、ミラノで月額13万円、ローマが20万円であるのに対し、日本は山手線沿線がざっと30~40万円、大阪市内が15~20万円です。やはり分譲・賃貸共に東京の高さが際立ちますが、ミラノ、ローマの住宅価格はだいたい日本の近畿圏或いは大阪並みと言えそうです。また、統計によると住宅一戸当たりの平均面積は92㎡、家族一人当りの部屋数が1.4室で、日本はそれぞれ95㎡と1.8室です。平均値だけで一概には判断できませんが、広さ的にはあまり大差はなく、むしろ日本の方が大きいくらいです。

それでは一般的なイタリア人のお宅を覗いてみましょう。

もちろん全てがそうだということではないのかもしれませんが、たいていのイタリア人の家の中はとても掃除が行き届いて小ざっぱりと片付いています。私がお邪魔した何軒かのお宅も散らかって

いた家など一軒もなく、それも客を家に招待するから急場のぎで取り急ぎ片づけたという気配が伺えるような片付き方ではないのです。ある程度のクラスになればゴルフとかドンナと呼ばれるお手伝いさん(なぜかフィリピン人女性が多い。)を雇うこともあります。そうでない場合でも家の中は常にきれいに片付けています。そして、各部屋は手入れの行き届いた家具、壁には洒落た絵画、テーブルや書架には家族の写真や気のきいた置物、それらをエレガントに演出する間接照明と、イタリア人持ち前の美的センスが存分に発揮されています。最近では段々と意識が改善されてきているとはいえ、一歩街に出るとペットのフンの始末やタバコのポイ捨てには結構無頓着な彼らの姿からは、いったいこの落差は何なのだろうと考えてしまうくらいです。

玄関の扉はポルタブリンダータ(porta blindata)と呼ばれる、防犯のために内部を太い鉄棒が縦横に施された頑丈な扉が付けられていることが多く、このような扉ですからその鍵も立派な頑丈なもので、まるで金庫のカギを開けるような感じでガチャッ、ガチャッと回して開け閉めしなければなりません。ですから普段はこの鍵に加えてメインエントランスの鍵、クルマのキー、場合によっては勤務先の事務所の鍵と大きく重い鍵束を持ち歩くこととなります。



【ポルタブリンダータ (porta blindata)】

家の中はリビング、ダイニングキッチン、バスルームに2部屋か3部屋の寝室或いは子供部屋、そしてテラスというところが一般的な間取りです。バスタブとトイレ・ビデはひとつの部屋で、たいていの場合ここに洗濯機も置かれています。大きな

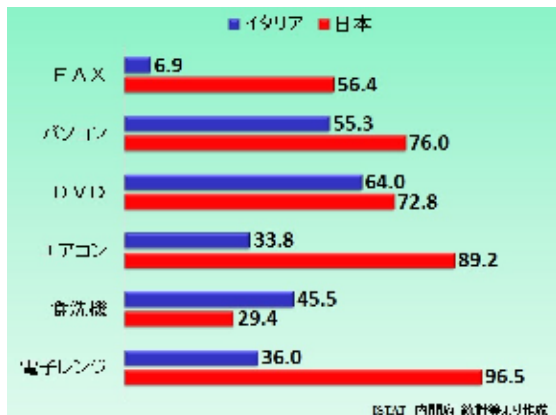
家になると更にシャワーボックスが別にあったり、バス・トイレが2~3か所付いている間取りの家もあり、また、地下にはボックスと呼ばれる車庫や物置スペースがついているところもあります。

家庭電化製品の顔ぶれはおおむね日本とそう変わりはありませんが、いくつか違いをあげるとすると、まずエアコンがあるでしょう。各部屋に一台と言っても良いくらいに普及が進んだ日本とは異なり、イタリアの一般家庭へのエアコンの普及率はようやく30%を超えたところで、どこの家にもついているというわけではありません。湿気も少なくカラッとした地中海性気候のおかげで日本のようになくては過ごせない必需品ではないからですが、とは言え、やはり真夏ともなれば気温も上がり、ひと夏に何度かは寝苦しい夜もあります。カーエアコンの普及でその心地よさを味わったイタリア人たちはやっぱり家にも欲しいということで、エアコンはこれから徐々に普及が進んでゆくものと思われま

す。もうひとつは洗浄トイレ、いわゆるウォシュレットです。日本では一般家庭にも普及が進み、今や70%を超えています。なぜかイタリアでは全く普及の兆しが見られません。一般家庭はもちろん病院や学校、ホテルなどの公共施設においても。こんなに清潔で心地の良いものがなぜなのかという疑問を何人かのイタリア人にぶつけてみたことがあります。イタリア人の統一見解というわけにはゆかないものの、彼らの答えは一律に「何か気持ちが悪い。」というものでした。イタリア人と日本人の排便作業におけるコンフォタブルネスの概念は異なるのか?と想ったりもするのですが、少なくとも普及しない理由が規格や設置構造、ましてや水質の違いなどによるものでないことは確かなようです。

キッチンに移ってみると、炊飯器がイタリアの台所にないのは当たり前として、対象的な二つの電化製品があります。電子レンジと食洗機です。ほとんど解凍・加熱の“チン”機能しか使われないにせよ、電子レンジはほぼ全ての日本の台所に普及しています。一方、イタリアでは当初は電磁波に対する健康被害への根強い不信感や冷凍食品の少なさなどがネックとなってなかなか普及が進まず、現在も普及率は40%弱程度に留まっています。逆に食洗機の方は日本での普及率がま

だ3割を切っているのに対して、電子レンジほどの差はないにせよ、イタリアではほぼ2軒に1台と、より普及が進んでいます。でも、「どちらも主婦の仕事を軽減する便利な道具でありながら、この違いの背景には、日本人の主婦は準備に手を抜き、イタリア人の主婦は後片付けに手を抜きたがる性向があるのかも、、、」などという穿った分析は両国のご婦人方からお叱りを受けてしまうかもしれませんね。



【日伊 家電普及率対比】

同じアッパルタメントに住む人たちがお互い快適に生活するために一定のマナーやエチケットを守るのは当たり前のことですが、やはりご近所とのトラブルや悶着はしばしば起きているようで、ある調査では4人にひとりが何らかの問題でご近所との口論に発展したことがあると答え、時には警察沙汰に発展するケースもあります。

こうしたトラブルや悶着の原因は多い順に、敷地内での迷惑駐車、夜間に椅子やテーブルを動かす音、ペットの不始末や鳴き声、階下への水漏れ、共有スペースへのごみ放置、ベランダでのクロスはたき、子供の騒ぎ声と続き、果ては夫婦喧嘩のみならず夫婦の営みの実況音までが連なります。

子供を敷地内の共有スペースで遊ばせる時間を決めたり、ホームパーティを開く前日にはエレベーターホールにその旨の通知を貼り出して予

めお詫びをするなどのルールや配慮は当たり前なのですが、建物の造りが悪かったりすると上下左右のご近所から発生する様々な生活音に悩まされることになります。私がミラノで最初に住んだアッパルタメントもそうで、上階に飼われるペット犬が夜な夜な室内を徘徊する時の爪音がどうにも我慢ができなくなり、かといって実際に怒鳴りこむのも大人気ないと、ホウキの柄で寝室の天井をコンコンとつついてこちらの蒙っている迷惑に対する無言の抗議を試みたことがあります。しかし、結果は天井からはげ落ちてきた漆喰の破片が顔面に降りかかってきただけで、この試みは失敗に終わりました。—— ドルチェカーサ (dolce casa、スイートホーム)の舞台裏にはこうした日々の闘いもあるのです。



【イタリアのリビングルーム】

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

ベスティアリオ
イタリアロマネスクの動物誌

第5回
～狐～

尾形 希和子

2011年9月21日からの4日間、プロヴァンス大学を会場に「国際ルナール学会」第19回大会が開かれた。この学会は Roman de Renard 『狐物語』を中心に、動物を主題とする叙事詩や寓意物語、ファブリオーなどの研究者の集まりである。文学研究者が大半を占めるが、中には動物図像を扱う美術史研究者もおり、私も象の図像について発表させてもらった。

フランス文学の事情に疎く恥ずかしながら参加するまで知らなかったのだが、この「国際ルナール学会」にも長年関わっておられるその道の世界的権威の先生方が日本におり、1996年には東京で特別大会が開催されたとのことである。今回はそのうち福本直之先生、原野昇先生がご参加になっており、はじめて参加する私にも大変親切にして下さった。日本人の先生方に限らず、スタッフ、参加者とも皆たいへん友好的なのだが、それはある参加者に言わせると「皆動物の友達だから」なのだそう(だからと言って皆が菜食主義という訳でもないのだが)。もう一つこの学会のユニークな点は、学会規約もなく、年会費も徴収しないことだ。縛りのないこのやり方で40年近く学会を維持してきたのはまさに稀有である。

さて『狐物語』とは、1170年頃から1250年頃にかけて、ほとんどが逸名の数多くの作家によって編まれた、狐や狼をはじめ様々な野生の動物や家畜が登場する一連の韻文寓話の総称である。フランスでは、もともと固有名詞だったルナールが、それ以前から存在していた狐を意味する一般名詞 *goupil* にとってかわるほどの流行ぶりだったようだ。俗語によって書かれた『狐物語』はフランスのみならずドイツ、オランダ、イギリスなどとくに北方で流行したが、イタリアのロマネスク聖堂にも『狐物語』の内容と共通する狐の姿がしばしば表されている。それらはあるいは口承で伝えられ、

あるいはパエドルスを通して紹介されたアイソパス(イソップ)の動物寓意譚などのラテン語文学の流れをひくものでもあろう。

モデナ大聖堂の「魚屋の扉」は『狐物語』編纂以前の12世紀初頭に作られたとされるが、その側柱には植图文様の中に三回狐の姿が描かれる【右図】。鳶、雄鶏と向かいあう狐は瀕死を装って聴罪司祭役の鳥たちに向かって告解し、鴉の前では自身を死んだように見せかけている。いずれにしても相手を油断させ次の瞬間に襲いかかろうという魂胆である。一番上の鴉の前の狐が舌をだらんと出して死体らしく見せる演技力は、さすがに「狡猾さ」の代名詞となるだけのことはある。『動物誌』でも定番のこの挿話は『フィシオログス』でも次のように語られている。



狐はまったくずる賢い動物である。狐は腹をすかせ食べ物が見つからない時には泥だらけの土地や藁置き場を捜す。そしてそこに仰向けに横たわり息をとめてじっとしている。死んだものと思って鳥たちが狐を貪りに降りて来たところを、狐はすかさず起き上がり彼らを抑え食べてしまう。

このように悪魔も悪魔の業も偽りに満ちている。肉を彼と共有しようとするものは死ぬ。彼の肉とは

淫乱、貪欲、放蕩、殺戮である。それゆえにヘロデは狐にたとえられ(ルカ 13:32)、そして律法学者は救世主が「狐には穴がある」というのを聞いた(マタイ 8:20)。またソロモンは『雅歌』で「葡萄畑をだいなしにする小さな狐たちをつかまえてください」(2:15)と言ひ、ダヴィデは『詩編』で「彼らは狐の餌食になるだろう」(62:11)と言った。フィオログスは、このように狐についてみごとに語ったのである。

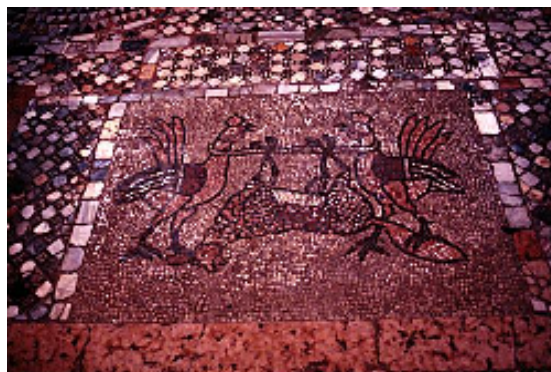
狐の実際の生態観察に基づく上のような描写は、彫刻ではモデナその他、ウンブリア州フォルニーニョの二聖堂やスポレートのサン・ピエトロ聖堂など聖堂に見られる。サン・ピエトロ聖堂ではファサード全体を浅浮き彫りが覆い、その中には聖ペトロの生涯のエピソードに混じり、狐の他、マリード・フランスの著作にも登場する僧侶になるべく勉強する狼や、獅子などが描かれる。イソップの寓話や『動物誌』は修道院付属学校での教育に用いられ、動物寓意譚は説教に中に取り込まれていたから、動物譚が聖人の生涯と共に描かれていてもおかしくはない。しかし特に『狐物語』は、12、13世紀にゴリアールやジョングルールたちによって書かれ演じられた滑稽韻文詩ファブリオー同様、性的表現やスカトロジック的表現をちりばめ、きわめて猥雑で下品である。狐のルナールと彼の不倶戴天の敵、狼のイザングランの争いや、ルナールが騙そうとして反対に一杯食わされる他の動物たちとの絡み、王や封建領主としての動物たちが巻き起こす事件も人間の本性や封建社会や結婚制度などのパロディーであり、アイロニーに満ちた笑いをひき起す。聖堂に表された動物たち、説教の中の動物たち共に、もちろん教訓としても機能しただろうが、当時の諧謔への嗜好をも示しているようだ。

イタリア・ロマネスクの聖堂には「死んだ振りをする狐に近寄る鳥たち」と同様、「狐の葬式」場面もしばしば表される。彫刻としてはモデナ大聖堂「魚屋の扉」のアーキトレーヴ【図2】やヴェローナのサン・ゼノ聖堂のクリプタ入りロアーチヴォルト、床モザイクではムラーノ島のサンティ・マリア・エドナート聖堂【図3】、ラヴェンナのサン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂【図4】、かなりの修復を被っているがヴェネツィアのサン・マルコ聖堂のもの他、かつてはヴェルチェッリのサンタ・マ

リア・マッジョーレ聖堂にもあった。これらはいずれも二羽の雄鶏がルナール(ここでも彼は死者を装う)を運ぶ葬送行列の一コマである。このうちモデナとヴェルチェッリの例はルナール(あるいは彼を入れた棺)を担架のようなもので運んでいるが、他のものではルナールは一本の棒に獲物のようにぶらさげられている。ルナールの遺体を担ぐのは、日本語に訳されているヴァージョンでは「(動物たち)みんな」(注 1)、別のヴァージョンではロバということだが(注 2)、北イタリアでは、おそらく二羽の雄鶏の棺担ぎのヴァージョンが流布していたのだろう。ヴェルチェッリの失われたモザイク画のデッサンによると、ロバや他の鳥たちに伴われたルナールの葬送行列が円環の中に二つの場面に分けて描かれていたことがわかる。二番目のシーンでは死んだ振りをしていたルナールがやおら起き上がり、棺を運ぶ鶏の一羽に襲いかかっている。



【図2: モデナ大聖堂「魚屋の扉」アーキトレーヴ】



【図3: サンティ・マリア・エドナート聖堂 床モザイク】

リアの賢さ、狡猾さは、もちろん日本の民話などでもおなじみだが、日本ではこの動物は稲荷神のように神の使者、あるいは神そのものの化身でさえある。また西洋の狐は日本の狐のように化けることはない。ギリシャ・ローマ神話では日常茶飯事であった人間や神が動物に、反対に動物が人間

にという種を越える変身は、狼男などフォークロアの世界にはその残滓があるものの、キリスト教世界でそのタブーを侵すのは「悪魔」なのだ。実際狐は『フィシオログス』でも悪魔と見なされていた。狐の毛皮の色と同じ赤毛が「裏切り者」の象徴としてユダに付与されるのもそれゆえである(注3) (日本人には褐色、あるいはオレンジかった「黄色」と認識される狐の毛の色はイタリアでも rosso である。ちょうど卵の「黄身」が黄色でなく rosso であるように)。



【図4: サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂 床モザイク】

今日では里山が破壊され狐や熊や猪、猿など様々な動物たちが食料を求め人家のある場所まで降りて来る。時折狐などに家畜を奪われることはあってもかつては棲み分けができていた人間と動物たちの関係は崩れ、今や野生動物たちは作物を荒らすだけでなく、時には人間の生命をさえ脅かす存在となってしまった。しかし環境を破壊し続けかつての人間と動物、すなわち人間と自然の関係を悪化させているのは人間の方なのだ。かつては西洋でも動物たちの生態を観察し、彼ら

の知恵を尊敬し、彼らの姿の中に人間世界の写しを見た。日本でも未だに稲荷神を祀ってはいるものの、現世のご利益を祈願するだけでもはや自然にたいする崇敬の念は失われてしまったかにみえる。狐や他の動物たちについて先人が著わした物語を読み、聖堂に刻まれた動物の姿を今一度見直して、私たちは人間の自然へのかかわり方について再考するべきだろう。

今回をもちまして「イタリア・ロマネスクの動物誌」は終わりです。皆様がイタリアにいらしてロマネスクの聖堂を訪れたときに、そこに表された動物たちに関心を向けて下さるきっかけとなりましたら幸いです。ご愛読ありがとうございました。

注1) 鈴木覺・福本直之・原野昇訳、『狐物語』岩波文庫、2002年、281頁

注2) Chiara Frugoni, “Il ciclo dei Mesi nella <Porta della Pescheria> nel Duomo di Modena”, *La Porta della Pescheria nel Duomo di Modena*, Modèa, 1991, p.41

注3)『狐物語』78頁

図版

- 1) モデナ大聖堂「魚屋の扉」右側柱、1100年代初頭
- 2) モデナ大聖堂「魚屋の扉」アーキトレーヴ、1100年代初頭
- 3) ムラーノ島、サンティ・マリア・エ・ドナート聖堂床モザイク、1140年頃
- 4) ラヴェンナ、サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂、床モザイク、1213年

(沖縄県立芸術大学教授)

… 会館 だより …

イタリア語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

- 京都本校: 日本イタリア京都会館
- 1/ 7 (土) 11:00~12:30
- 1/ 7 (土) 13:00~14:30
- 1/11 (水) 11:00~12:30

- 四条烏丸: ウイングス京都
- 1/12 (木) 19:00~20:30
- 梅田: 大阪駅前第4ビル
- 1/ 6 (金) 19:00~20:30
- 1/ 8 (日) 13:00~14:30

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館
 〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
 TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
 E-mail: centro@italiakaikan.jp
 URL: <http://italiakaikan.jp/>